

## SF 短編元ネタめぐり

工学部 2回生 岡崎総一郎

私が藤子 F 不二雄先生(以下 F 先生)の SF 短編を初めて読んだのは高校生活が佳境にさしかかる頃で「絶滅の島」である。小学生時代に小学館コロコロ文庫版ドラえものの巻末広告で取り上げられていたのを気になっていたものの、ついぞ読まないまま数年が経過し偶然にも古本屋で発見した「少年 SF 短編集(2)」(小学館コロコロ文庫)で邂逅したのだった。尤も、その場で買わずに後日立ち寄ったところ売り切れてしまっており、「絶滅の島」を手にするのは更に月日が経ち大学入学後に「藤子・F・不二雄大全集 少年 SF 短編 (3)」が発刊されてからだった。初めて読んだときと変わらぬ衝撃を受けた私は他の短編集も買い集め、それ以来 F 先生の描く SF 短編の虜となった。ほんの数十ページだけで設定が広げられ一気に収束していく、若しくは無限に発散していく様は見事である。生来のオタク気質であった私は「F 先生とは言えニンゲンだ! 発想のタネがどこかにあるに違いない」と元ネタとなった SF 小説を調べ読み漁る旅へと出たのだった。

本稿では SF 短編のうち 3 作品「ひとりぼっちの宇宙戦争」(フレドリック・ブラウン「闘技場」)、「流血鬼」(リチャード・マシスン「地球最後の男」)、「老年期の終り」(アーサー・C・クラーク「幼年期の終り」)を取り上げ、オマージュ元との比較を扱う。さて、性質上どうしてもネタバレを避けることができない。今あなたが運良くも京都大学構内で読んでいるならば藤子不二雄同好会の会場共東 32 で 3 作品を読むことを強く推奨する。「ひとりぼっちの宇宙戦争」「流血鬼」は「藤子・F・不二雄大全集 少年 SF 短編 (1)」に、「老年期の終り」は「同 (2)」に収録されている。また元ネタとなった小説が気になった方は、筆者が所持しているので声をかけて頂ければお貸ししよう。ところで、私の誕生日はブラウンと同じで氏には並々ならぬ思い入れがある。フレドリック・ブラウンはショート・ショートの名手であり、幼い日に星新一に耽溺した諸兄のお眼鏡に適うこと間違いなしである。「闘技場」「殺人十課」「未来世紀から来た男」などで氏の魅力を存分に味わえるだろう。F 先生のファンとしては、短編「二十世紀発明奇譚」シリーズには F 先生の未来デパート販売員シリーズと似た趣があることも見落とせない。

### 「老年期の終り」×「幼年期の終り」(アーサー・C・クラーク)

「老年期の終り」(初出 1973 年『マンガ少年』08 月号)

科学技術の発達とは 23 世紀にワープ航行を生み人類は銀河の果てまで進出し、西暦 3065 年に銀河連邦が誕生した。人類は意欲と希望に満ち溢れた時代-種としての「青年期」-を経て、西暦 8000 年代の半ばを迎える。銀河連邦全体で出生率が低下、文化も停滞していた。人類

は意欲を失い「老年期」に差し掛かっていたのだった。中継基地としての役割を終えたラグラング星の人々は翌日に惑星の放棄、地球への帰還を控えていた。寂れた種の寂れた星に 21 世紀に地球を離れた宇宙船が降り立つ。医学生マリモの手によって乗務員のイケダは 6000 年のコールドスリープから目覚める。夢と情熱に燃えるイケダ青年だったが、ラグラング星の住人から地球への帰還を告げられ絶望する。ゲヒラ老から人類の発展と老衰を聞いた彼は新たな文明との出会いを求めて、再びの孤独な宇宙旅行を決意する。マリモは彼に付き添うことを選び、1 組の男女が宇宙へと飛び出す。母なる地球への帰還と若者たちの無限の冒険を、ラグラングの丘にひとり佇むゲヒラ老は眺めるのだった……。

### 「幼年期の終り」(Childhood's end) (初出 1953年)

冷戦の過熱は宇宙開発を呼びまさにロケットが打ち上げられようとしていたそのとき、各国首都直上に宇宙からの円盤が出現する。宇宙人の代表はカレルレンと名乗り、彼らが地球を管理することを宣言する。彼らの圧倒的な技術力によって地球は完全に平和に統治され、人類は彼らをオーバーロードと呼ぶようになった。オーバーロードの出現から50年、天文学者ジャンは彼らの宇宙船に忍び込みオーバーロードの母星への片道40年の密航を成功させる。太平洋のある島嶼では芸術家たちが集い芸術の発展を目的とした独自のコミュニティを形成していた。そこに住む子供の一人が超能力に目覚める。時を同じくして全世界で生まれる子供らはエスパーを身につけた新人類として生まれ始めた。精神を土台する彼らは物質に縛られた旧人類とはまったく異質な存在であり、従って旧人類から新人類が生まれることは旧人類の絶滅を意味していた。旧人類が絶滅に瀕するときジャンは寂れた地球へと帰り立つ。オーバーロードはジャンに彼らが行き詰っており、彼らもまたオーバーマスターと呼ぶ精神生命の補助、つまり旧人類の新人類への進化の促進、をしていたに過ぎないと告げる。新人類が成熟しつつあるいまや彼らの役割は完全に遂行され、オーバーロードは母星へと戻る。ジャンは一人地球に残り、新人類の発する精神エネルギーが地球を破壊し尽くし、そして新人類がオーバーマスターとして宇宙へ進出する様子を末期の瞳に映すのだった……。

「老年期の終り」が「幼年期の終り」を意識して描かれたのは明確だろう。「幼年期の終り」ではジャンが旧人類の最期と新人類の誕生の観察者として重要な役割を担っていたが、「老年期の終り」ではゲヒラ老が同じ役割を果たしている。しかしゲヒラ老と同時に、イケダ青年もジャンと同じく人類の幼年期と老年期両方の目撃者である。さて、「幼年期の終り」では新人類、つまり人類ではない生命が物質世界のブレイクスルーだったが、「老年期の終り」では希望の光はイケダ青年とマリモだった。この違いに注目したい。F 先生は人類という種の老衰を通して、人類の限界にみえるものはその社会の限界であり、人類の精神に本質的な限界は存在しないと描きたかったように思われる。人類は確かに銀河中に広がったが、銀河連邦という一枚岩の上にあった。

従って人類という「種そのもの」と銀河連邦という「社会」のどちらが本当に衰退しているのかは内部から区別できないのだ。ここで、21世紀からやってきたイケダ青年が2つの老衰と無縁なのは当然として、マリモが新たな出会いを求め宇宙へと出たのは極めて示唆的だろう。F先生は老人が若者に希望を語りかける構図は好んで使っており、ドラえもん「45年後…」や「宇宙人」などがある。人類そのものに希望を見出す作品は後の「流血鬼」の項で紹介したい。

## 「ひとりぼっちの宇宙戦争」×「闘技場」(フレドリック・ブラウン)

「ひとりぼっちの宇宙戦争」(初出 1975年『週刊少年サンデー』37号)

空想が大好きな鈴木君は新聞部所属で、同じく新聞部のエミちゃんに惚れている。UFOを観たという老人を取材した彼は異星人の存在を声高に主張し記事にしようと試みるが部員らにあっさりと却下されてしまう。その晩、二人組の異星人の手により時が止められ彼のDNA情報がコピーされる。鈴木君は地球人の代表として、己と全地球人の命を賭けた決闘に出場することになったのだった。対戦相手はなんと自分自身のクローン・ロボット。時が止められ静止した住宅街の中で2人だけの宇宙戦争が開戦する。冷酷無比なロボットは勝負に徹することができない彼を的確に追い詰め、勝ち目のない戦いだと言音を上げる鈴木君だったが、異星人は「ロボットは持たず人間だけが持つ強さ」があると囁く。ロボットに追い詰められた鈴木君はエミちゃんの家に迷い込む。そこで「人間だけが持つ強さ」に気づいた彼は……

「闘技場」(Arena)(初出 1954年『Honeymoon in Hell』)

未知なる敵アウトサイダーと交戦中の地球軍所属、ポップ・カーソンは目を開けると一面が青色のドームに倒れていた。熱気、砂地、青いトカゲ、赤い球体、彼はそこが地獄ではないかと考えたが、頭に響く声が告げた。地球人とアウトサイダーの代表を1個体ずつ取り出し代表として戦うことになった、敗北した種族が全滅する、と。赤い球体がアウトサイダーだったのだ。彼らはドームを二分する何らの障壁に隔てられ、その障壁は地球人もアウトサイダーも青いトカゲも通さないが石を通す、何を基準に通過できるのか一切わからないものだった。人類の戦争史を紐解きあらゆる可能な武器を作り攻撃するカーソンだったがアウトサイダーの精神攻撃に疲弊する。しかし、彼は子細な観察から障壁を突破する条件を見つけ……

「ひとりぼっちの宇宙戦争」では人間のみが持つ武器とは「火事場の馬鹿力」だった。エミちゃんの家に侵入したロボットを目にした鈴木君は、地球人が捕獲された未来を想像し、そしてエミちゃんを守ろうと決心する。序盤にエミちゃんにほのかな恋心を抱いていることが示唆されたり新聞部部長が火事場の馬鹿力を紹介したりと、伏線がちりばめられており結末は十分に予測でき

る範囲にあった。「闘技場」では障壁を破る条件は「生きながらにして意識を失っていること」だった。生きた青いトカゲもその死体も通らなかったが瀕死のトカゲだけは通ったことに気づき、カーソンは自分を殴って意識を飛ばすことで障壁の向こう側へと繰り出し、アウトサイダーを倒すのに成功した。

元の「闘技場」では勝利への決定打が理性に基づく観察だったが「ひとりぼっちの宇宙戦争」では感情そのものだった。F 先生が SF とは Science Fiction の頭文字でありながら「すこし不思議」(Sukoshi Fushigi)の頭文字でもあると語っていたように「ひとりぼっちの宇宙戦争」では孤独な閉鎖空間での戦いが静止した日常での戦いへと変換されていた。戦いの舞台、登場人物の数、性格付けなど物語の設定が増え、より「人間らしい」キャラクターが描かれている。「すこし不思議」を体現した作品である。

## 「流血鬼」×「地球最後の男」(リチャード・マシスン)

「流血鬼」 (初出 1978 年『週刊少年サンデー』52 号)

奇病がルーマニアで発生し、その感染者は吸血鬼になるという噂が主人公たちの間で広まる。教師や主人公の両親はオカルトだと一笑に付していたが、身近で感染者が生まれるとともに事態は深刻さを増す。主人公は親友とその兄の3人で釣りへ出かけると、親友のまわりでも被害が生まれていると話を聞く。父親が感染者である部長の葬式に参列したところ、棺がこじ開けられ遺体は忽然と姿を消していたのだったという。彼らが街へ帰るとパンデミックが発生していた。釣りへ行っていた3人で脱出を試みるも親友の兄は吸血鬼に咬まれたことを告白し、主人公と親友の二人きりになってしまう。2人は秘密の洞穴を拠点に、吸血鬼の動けない屋間に食糧の確保と吸血鬼の討伐を続けていたが親友が吸血警官に撃たれ、ついには主人公ひとりぼっちになってしまう。最後の人類として抵抗を続けるも吸血鬼となったヒロインに洞穴を発見される。彼女は主人公を眠れる吸血鬼を殺す「流血鬼」だと糾弾し、吸血鬼になるよう説得する。首を縦に振らない彼を、ヒロインは他の吸血鬼がそうする前にと、力づくで彼を吸血鬼にする。吸血鬼として目覚めた主人公は夜の光がやさしいものだを知る……。

「地球最後の男」(I Am Legend) (初出 1954 年)

感染者を殺し、死後に吸血鬼へと変える死のウイルスが世界中に蔓延る1970年代。ネヴィルは最後の人類だった。彼は屋間は食糧の確保と杭による吸血鬼の刺殺に励み、夜は堅牢に改造した自宅に籠城し襲ってくる吸血鬼から命を保っていた。禁欲と孤独に苦しむある日、彼はルースと名乗る女性と出会い2人は同棲生活を始める。かつての人類はネヴィルと吸血鬼、そしてウイルスに冒されながらも生きて吸血鬼になった新人類に三分され、ルースは新人類がネヴィルの元へと送り込んだスパイだった。ネヴィルを愛してしまったルースはスパイとしての使命

を捨て、彼に逃げるように進言する。彼は自宅で吸血鬼を迎え撃とうとするが抵抗むなく捕われる。新人類が彼を恐れる様を見て悟る。夜に人類を襲う吸血鬼とまったく同様に昼に、新人類を殺すネヴィルもまた彼らにとっての恐るべき伝説上の存在だったと。ルースの差し出す青酸カリを口に、ネヴィルは自決するのだった……。

「流血鬼」と「地球最後の男」は終盤までほとんど同じシナリオを辿る。「地球最後の男」の「主人公を除いて人類が絶滅する」「オカルトの科学的説明」「最後に示される価値観の逆転」といった要素は以後の作品群に大きな影響を与えており、「流血鬼」もその一つである。「流血鬼」中で謎のウイルスは「マチスンウイルス」と命名され、「地球最後の男」の作者リチャード・マシスンから振ったのは明らかである。さて、「地球最後の男」ではネヴィルが旧人類として無念の死を遂げる悲劇の英雄譚である一方、「流血鬼」では旧人類だった主人公が吸血鬼として新たな誕生を迎えるハッピーエンドであるのが決定的な違いだ。F 先生はハッピーエンドを好んでおり、その思想がよく表れている作品となっている。人類滅亡に瀕した登場人物らが希望を見出す作品に「みどりの守り神」「老年期の終り」、価値観の逆転を利用した作品に「絶滅の島」が挙げられる。是非一読してみてほしい。